

昭和三十年三月、旧山田町、豊間根村、大沢村、織笠村、船越村が合併して誕生した山田町。今年で五十年の節目を迎えました。これまでの歴史には明るい話題もあり、苦難の道もありましたが、この町の発展は先人の熱意と汗なくしては成し得ませんでした。今号では、合併五十周年記念企画として、この町で暮らしてきた先人の生活や町の移り変わりを伝えるため、「目で見る町の歴史」をコンセプトに、山田のおいたちから合併前、そして合併後の主な出来事の写真を紹介し、その歴史を振り返ります。

## 山田町のおいたち

霊亀元年（七一五）、須賀君古麻比留等が閉伊郡（閉伊郡）に郡家を建てることを願い、許されました。このことから奈良時代初期には、国政が閉伊の地にも及んでいたことが分かります。

文治五年（一一八九）、源頼朝は奥州藤原氏を討ち奥州を諸將に分与、源為頼は頼朝より閉伊郡を賜り、閉伊頼基と名乗って閉伊郡を治めたといわれています。弘安八年（一一八五）ころには、閉伊三郎左衛門十郎が閉伊郡を治めています。

時代がくだり、遠野阿曾沼氏の一族、大槌孫八郎は南部氏によって大槌城代に任ぜられ、その所領は平田から豊間根まででした。慶長十八年（一六一三）、大槌氏の失脚後に浜田氏、後に下田氏が城代を務めました。寛永九年（一六三二）には城代を廃し、代官（代官所）を置き、その治下としました。

享保二十年（一七三五）、南部藩は領内を三十三通りに整理し、大槌通り大槌代官所の管轄は二十三カ村で、山田地方は船

越・織笠・轟木・下山田・上山田・飯岡・大沢の七村。豊間根・石峠・荒川の三村は従来どおり宮古通り宮古代官所の管轄となりました。代官所制度は明治二年までの二百三十七年間も続きました。

明治二年、山田地方の十カ村は盛岡県に属し、同四年には江刺県、同四年十二月には改正盛岡県に属し、同五年には盛岡県が岩手県と改称されました。

明治九年には、上山田村と下山田村が合併して山田村に、織笠村と轟木村が合併して織笠村となりました。同十二年、閉伊郡を西・南・東・中・北の五つに区分し、山田地方の八カ村は東閉伊郡の管轄になりました。

明治二十二年、市町村制の施行により、荒川村、石峠村、豊間根村が合併して豊間根村に、山田村と飯岡村が合併して山田町となり、山田地方の一町四カ村は、同三十年四月に下閉伊郡下の管轄となりました。

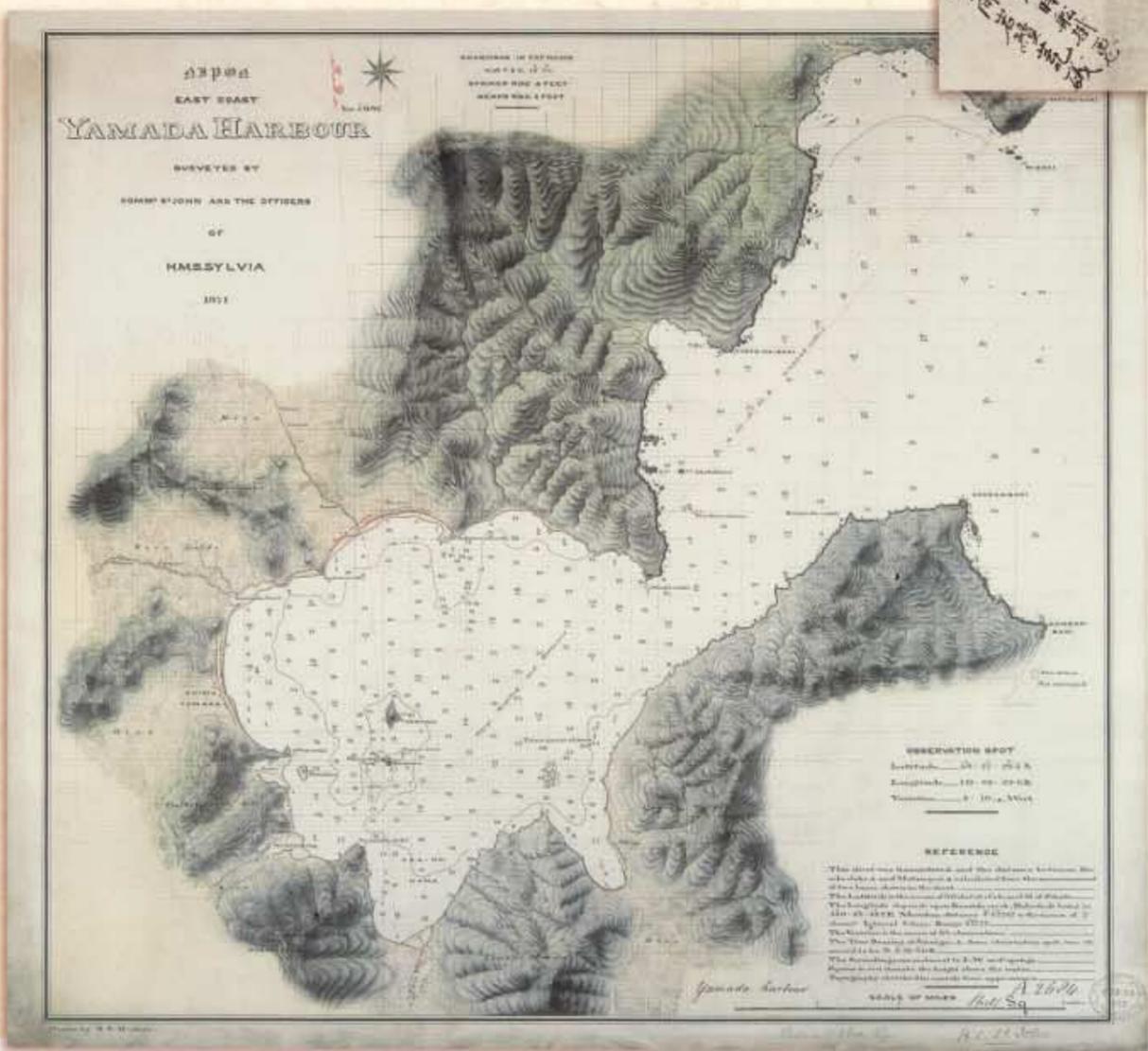
当時の集落や町並みを絵図などからうかがうことができます。



南部領内図・正保国絵図控図（江戸時代）＝盛岡市中央公民館所蔵＝幕府に提出した南部領内図（正保国絵図）の控図（縮図）。村の名称や街道などの情報が詳細に記されているのは、交通路の把握が重要視されていたためである。山田湾の中心には寛永20年（1643）に入港したオランダ船プレスケンス号が描かれている



山田浦之図（江戸時代末期）＝岩手県立博物館所蔵＝佐々木藍田が書いた山田湾周辺の絵地図。近代化による港湾整備が進む以前の山田湾の様子や、当時の街道を知ることができる。船越の中心地が前須賀にあったことが分かる



山田湾の海図・複製品（明治4年）イギリス艦シルヴィア号が明治4年に山田湾を訪れて測量したものの。海図には海岸線や水深のほか、山の形状なども記され、帆船の入港に必要なデータがそろっている。また当時の町並み、川、水田、畑も記されていることから、飲料水や食料などの補給も可能であり、入港に最適な湾だったことが分かる